



人生をゆさぶる

Boldly Venture

永田円了

日常をマクロで見れば、とりたてて目立つこともなく、ありきたりの出来事の連続でも、ミクロで見れば、刻一刻を感じたり考えたり、人の意識は変幻きわまりない動きに満ちている。実は何も起こらない平凡な日常などありえない。否応なく何かが起こっているのである。

ゆるやかに流れる日常、ある日突然何かに気づく。日常という惰性的時空のなかで、私たちは自分を埋没させ、記憶を平坦化させる。人は愉楽と安逸のなかで、自分が腐食し生の力を失っていくのに気づかない。自己喪失の過程のなかで新しい自分に出会うには、何かゆさぶり、何も劇的な大ゆさぶりである必要はない。日常のちょっとした気づき、それによって意識が変わり行動が変わる。

真のリスクは、リスクのない日常に潜む

ウナギの養殖では、稚魚のシラスはカナダから飛行機で輸入する。12時間の空輸のうちに、8割は死んで届けられる。しかし、水槽に稚魚の天敵であるナマズを放して運ぶとどうなるか？なんと、稚魚の2割はナマズに食べられるが、残りの8割は生き生きと日本に到着するという。

稚魚にとっては、ナマズは敵、しかし実際はこのリスクのお陰で、稚魚は元気でいられるのである。人生、いや魚生にも生きていくうえで、“ゆさぶり”が必要なのである。

米国シアトル郊外にあるショッピングセンターでのこと。5000台収容の駐車場をもつこのショッピングモール（Bellevue Square）、駐車場からモールに入る道路にあった横断歩道が取り外された。何故か。実は歩行者が車に跳ねられて亡くなる件数が、横断歩道できわめて多いというデータが米国で発表されたからである。

歩行者は、横断歩道という安心領域の中で惰性的に無防備になる。横断歩道をなくすることによって、リスク（ゆさぶり）が与えられ、歩行者は左右を確認し、自らを守りながら道路を横断することになる。ウナギの稚魚が、ナマズという“ゆさぶり”を意識した結果、生き生きとして日本に到着することと同じことなのである。



人間は『幼形成熟』できる

人間は幼形成熟できる動物である。人以外の動物は、成獣になると成長が止まる。身体的成長のみならず、知能の成長も止まる。しかし人間は、いつまでも知能・意識を幼児のような柔軟性を保ちながら、成長できるという。しかし現実にはなかなかそうはいかない。人は年をとれば、それなりに頑固になり、意識は既知なものに頼り、未知なものに対しては、恐れをもつ。だから人生にゆさぶりをかけるのである。そして“人生にゆさぶりをかけ続ける”こと。このことに気づかず、平坦な毎日を送れば、必ず固まる。



三重苦の中から、計り知れないエネルギーで人々をエンパワーしたヘレン・ケラー女史。彼女のコトバは、私の“人生をゆさぶる”エネルギーの源となっている。

人生とは、思い切った冒険なり。それ以外はただの藻くす
(Life is either a daring adventure or nothing at all.)

<事例 DVD>

矢沢永吉 / 人生はゆさぶり、ゆさぶり続ける人生
加賀乙彦・精神科医、神が悪魔（＝凶）をつくった
印刷会社経営・熊谷雅也、東日本大震災を体験して
なかにしれ、ありふれた日常からは、歌は生まれない
脳科学者・ジル・ポルト・テイラー女史、奇跡の脳
デッドボールの事例、清原選手、イチロー選手の場合
冒険家・戸高雅史、8000メートルの登山中、食料を落す
野生のヒョウ、野生の動物は、恨みをもたない

円了のホームページ: www.enryo.jp

